大会レポート
クラブカップ 2004
2004 年 10 月 3 日

円井 ・クラブカップを語る

円井基史

大逆転！多摩 OL のアンカー円井基史が語るクラブカップ。
彼は三冠を達成した多摩 OL の監督でもある。

ウイニングランを決める円井基史
クラブカップ 2004 年 10 月 3 日（日）
長野県駒ヶ根市駒ヶ根高原

雨のクラブカップ

昨晩から降り出した雨は一向に止む気配がないが、目の前のレースはさらに熱気を増してきたように感じられる。

序盤の混戦が終息し、次第に有力チームが頭角を現しつつあった。そんなレース中盤、ステージ中央の速報ボードには、緑の目玉が 4 つ、ギョロリと光っていた。多摩 OL のシンボルマークの、あの特徴的な目玉である。速報ボードの 3、4 位に、多摩の A、B チームが寄り添って並んでいた。

クラブカップを目指して

多摩 OL はクラブカップに向け 6 月に始動した。

9 月までの 4 ヶ月間でこなした参考レースは 9 レースに及んだ。練習会 3 回に合宿 1 回。

合宿のメニューは、クロカン走に始まり、ミニレース 3 本、オプションメニュー6 本、朝ジョグ、チェイシング・コンピ、ランオブ指導、そしてクラブ対抗戦と続いた。

練習会では、縮尺を本番と合わせた上で、ミニレース 2 本、歩測練習、チェイシング・コンピ、リレー。

その他にも、片斜面で直進が要求される赤城や富士において、やはり縮尺を合わせ、自主トレを行ったメンバも少なくなかった。

アンカー勝負！

レースはいよいよフィナーレを迎えようとしていた。トップの Team 白樺の 7 走アンカーが出走して 7 分半後、多摩 A チームが 2 位で会場に現れた。タッチを受け、声援の中、レーンを駆け下る。

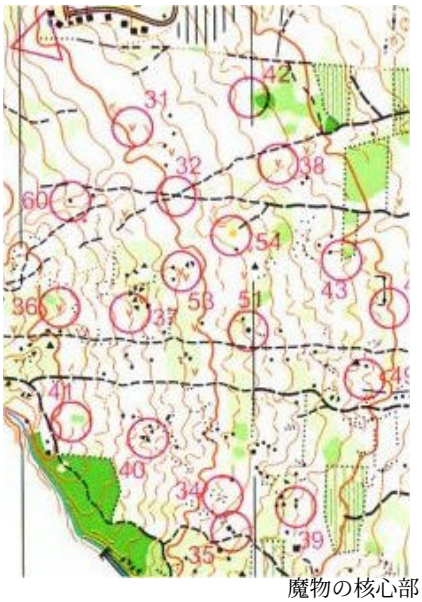
スタートまでは長い道走り。降りしきる雨の中、テープ誘導を淡々と辿り、静かな森に入る。地図から読み取れるテクニカルなレッグが、そして雨のしたたる薄暗い静寂の森が、大きな口を開けて獲物を待ち構えているような、そんな不気味な雰囲気を醸し出していた。一歩一歩進める歩みが、魔物の住む核心部へ近づいている気がして不安に駆られる。

このコースは本当に難しい。「これは荒れるな」、そう直感した。正直チャンスだと思った。見えなくなりかけたトップの背中が少し大きくなった気がした。

クラブカップにかける夢

会員数 60 以上を誇る大クラブ多摩 OL。下は中学生、上は 70 代、会員のバックグラウンドも様々で、その多様性と層の厚さが多摩の特徴であり強さである。

クラブカップへは 5 チームを送り出した。目標は、A チームの優勝、B チームの入賞・ファームチャンピオン、C チームの over 300 points、D・E チームのウム無しペナ無し完走。結果として 3 チームを表彰台に立たせること。それが今年就任したばかりの新米監督が描いた壮大な物語であった。



魔物の核心部
クラブカップコースの前半エリア
微地形エリアに多数のコントロール

我慢の前半

地図を裏返してのコントロール番号の確認動作がぎこちなく、脱出のプランニングが追いつかない。

コンパスが曇って、ベアリングセットに手間取る。コントロールで長時間立ち止まってしまう。動き出しても、ミスが怖く、スピードが上げられない。

突然、空から降ってきたかのように、京葉 OL のアンカーが逆方向から猛烈なスピードでアタックしてくる。何だ、そのスピードは。まさか追いつかれた？ その圧倒的なスピードを目の当たりにし、自分の遅さが際立つ。動揺し、次のコントロールでミス。甘い！気持を引き締め、長い直進を慎重にこなす。

車道に躍り出る。この坂を登れば 1 つ目のビジブルコントロールだ。待ってろよ、大観衆ども。さあ、教えてくれ。トップとの差は何分だ？

コミュニケーションのちから

35 の手持ちの駒を使い 5 チームの最適解を導くことは、この世で最も難解なパズルに感じられたが、また同時に、やり甲斐のあるタフで楽しい作業でもあった。同一コンセプト 4 コース×4 人×1 チームのインカレリレーと比べると、今回は、異種コンセプト 7 コース×7 人×5 チームであり、複雑さが断然異なる。

前日のスプリントレースにも多摩 OL は多数エントリー。テレインと地図の感触を確かめるように走る。

7 区間それぞれに特徴付けがなされており、かつ、制限選手、表彰制限を考慮しなければならない。さらには上位チーム候補に故障者が続出した。果てしないパズルであった。

実はこの部分で重要だったことは、パズルの正解を導くことよりも、パズルを解く過程において各選手と交わしたコミュニケーションと、その中で培われたチームの共有意識にあったように思う。

大歓声の中心へ！

道の曲がりから直進という何ともない簡単なレッグだった。第 1 ビジブルコントロールをトップで通過し、スピードは遅いがここまでノーミス。勝利はほぼこの手中にある。

ピークを巻き終えた時点で現在地がぼやける。コントロールの近くには来たはずだが、フラッグが見えない。進んでいる方向とコンパスの指す向きがいつの間にかずれている。不安になり少し戻る。コントロール発見。しかし隣接。ここは一体どこだ。落ち着け。つかみかけた勝利を、この手のひらから滑り落とすわけにはいかない。深い沢を確認する。ちっ。まだ手前か。先へ進む。正しいコントロールを発見。

残すは第 2 ビジブルコントロールとラスト・コントロールのみ。勝利を確信する。泥沼化した急斜面を器用に駆け下り、歓声のるつぼに落ちて行く。テープ誘導を辿る。仲間が待ち構えている。ウィニングラン。大歓声の中心へ突っ込んでいく。色とりどりの風景に包まれる。観客すべての視線を全身に浴びる。腕を差し上げる。そう、オレ達はやった。We made it!

夢が現実に

表彰式直前、C チームが over 300 points を獲得した知らせが入る。多摩陣地で歓声が上がる。

8 位でファームチャンピオンを獲得した B チームと合わせ、見事 3 冠を達成。壮大な夢物語が現実のものとなった。

結果として、多摩 OL から 3 チームが表彰台に登った。そして、3 年振りにクラブカップを奪還した。

最後になりましたが、山川さんをはじめとする運営者の皆さま、こんな楽しく盛り上がれる舞台をありがとうございました。

「いつでも戻ってきてよい場所」、「戻ってくる場所がある」、とても良いキャッチフレーズだと思います。来年以降もよろしくお願いします。

また、他クラブのみなさん、お疲れさまでした。次回も大いに盛り上がりましょう。熱い戦いを繰り広げたライバルクラブのみなさん、今後も、一緒に熱い戦いを演じましょう。そして、多摩 OL のみんな、感動をありがとう！

（円井基史）

3 年ぶりクラブカップを奪還した多摩 OL。カップにシャンペンを入れて勝利を祝う。